

「一緒に笑えれば、 悲劇は喜劇にも見えてくる」

— 関口祐加さん — ドキュメンタリー映画監督

病気と向き合っている方や乗り越えてきた方、医療現場で活躍されている方を紹介します。
今回は、認知症の母との日々を撮りつづける映画監督の関口祐加さんです。



『毎日がアルツハイマー』は、

映画監督の関口祐加さんが認知症になった母の日常を撮ったドキュメンタリーである。

この『毎アル』は、深刻な場面すらなぜかほほえましく、ときに観客の爆笑を誘う。

母の宏子さんは、良妻賢母の鑑のような人だった。

自分に厳しく、しつても厳しい。米屋の関口家に嫁ぎ、商売を手伝いながら、毎食きちんと手づくりし、二人の娘の勉強にも目を配った。

そんな母が……、じつは、関口祐加さんは苦手だった。

大学で国際関係論を学び、オーストラリアへ留学して、そのまま29年間、住みついた。

大陸の自由な空気とおいしい水が大好きで、国際結婚をして、長男の先人君が生まれた。母の様子がおかしい……。

と気づいたのは、2006年。母から先人君あてに同じ本や服が届くようになった。

2009年9月。母の79歳の誕生日を、関口さんは実家に帰って祝った。その2週間後、母がつぶやいた。

「私の誕生日に何かやった？」

「みんなでケーキ食べたよ！」

……

母は、思い出せない。

「ボケたうよ、ボケたうた」と、歌いはじめた。

関口監督はカメラを回しながら、ちよつぱり切なかった。だが——。レンズの中の母は、とてもかわいらしくみえた。

つらいときこそ、
一歩引く

母の認知症は進んでいった。

2009年のXマス。みんなでケーキを食べた夜に、母がカレンダーを見つめていた。

「どうしよう！ ケーキ買う



『毎日がアルツハイマー』1・2 DVD
3240円 発売：シグロ
販売：紀伊國屋書店
『毎日がアルツハイマー』は、1・2ともにDVDで観ることができる。「母に“毎アル”、大人気だよと言ったら、『ファンレターください』ですって(笑)」(関口監督)。

せきぐち・ゆか

神奈川県出身。1981年、大学を卒業後、オーストラリアを拠点にドキュメンタリー映画を製作。おもな作品に『戦場の女たち』(1989年)、『THEダイエット!』(2007年)。母との暮らしぶりを2年半撮りつづけた『毎日がアルツハイマー』(2002年)につづき、今年7月に続編を公開。介護に奮闘する人たちに元氣と希望を届けると評判を呼び全国各地での上映が決定。新刊『毎アルツイート・マミー』が、今秋発売予定。

の忘れちゃった」

母の不安でいっぱい目のを見て、関口さんは決心した。

もう一人にしておけない。

関口さんは単身、帰国。母と二人きりの生活が2010年から始まった。

宏子さんは、認知症と診断されてから約2年半、引きこもって外へ出なかった。

病院へもデイサービスへも行かない。ケアマネジャーを無愛想に追い返す。風呂を何度沸かしても入ってくれない。

トイレットペーパーが1日9ロールも消えるようになって、思い切って聞いてみた。

「何かに使ってない？」

と、さりげなく聞くと、

「私を監視しているのか？」

私の面倒を見るのが負担になるんだつたら出ていってよー」

翌日、洗濯機の上に、大量のトイレットペーパーで作られたお手製尿取りパッドを発見した。

ある日、関口さんは、母がボケ予防に続けている漢字練習帳の中に、一枚のメモを見つ

けた。

「だらしないのに、頭が狂っている」

胸を衝かれた。いちばんおびえているのは母なのだ……。

いたたまれなかった。

この頃が母と娘の正念場だった……と、いまは思う。

*

関口さんが大好きなチャリー・チャップリンの言葉がある。

「人生は、クローズアップでは悲劇だが、ロングショットでは喜劇である」

トイレットペーパー騒ぎも、近くで見れば悲劇だが、少し距離を置いて眺めれば、なんだか笑える。

「つらいときこそロングショットで見る。母のつらさを共有し、笑いで包む。一緒に笑えれば、何かが変わる」

関口さんは、母の映像をインターネット上の「YouTube」に公開し、たちまち話題と笑いを呼び、映画『毎日がアルツハイマー』(毎アル)に結実した。

母に寄りそうことを ネバー・ギブ・アップ!

認知症は、ステージ2に進むと、本人のつらい葛藤が薄らいでいく。母は関口さんの介護を素直に受けるようになった。

「それが逆にこわくなりました。母は私に従順になり、私は圧倒的な力をもっていることに気づいたんです。きつところから介護の虐待というものも生まれるんだ……。そう思っただけでした」

関口さんは、認知症ケアについて積極的に取材を続けている。「毎アル」続編の製作では、英国で「パーソン・センタード・ケア*」を行う施設を訪ね感銘を受けた。

「認知症と一括しないで、その人の人生や性格を理解した上でケアをする。あたり前のようだけど、実践はむずかしい。私には、(パーソン・センタード・ケア)の考え方はピッタリきました。私がいちばん気にしているのは、介護される側の

母の苦しみだからです。まさしく認知症の母の世界観を理解する手立てですからね」

母も、関口さんのことを違った目でみてるようになった。映画監督の仕事に反対だった母が、ある日こう言った。

「天職が見つかったね」

認知症という病気が、新たな母子関係を結び直している。「私は認知症になった母のほうがつつと好きなんです。よ人として解放されているように見えますから」

映画『毎アル』は、関口祐加監督のかけ声で終わる。

「ネバー・ネバー・ギブ・アップ!」

いまも、母の「毎アル」をツイッターで発信し続けている。「トイレ5回目。行くたびに私とハイタッチー」「無事にイケメン介護士のいるデイに出かけました!」――。

生きていることの哀しさ。

そして、すばらしさ。

今日も関口さんのロングショットが、あたたかい笑いを誘う。

「目の前の条件下で、ベストを尽くす そこに、医療の原点がある」

——黒崎伸子さん—— 特定非営利活動法人「国境なき医師団」日本会長・医師

病氣と向き合っている方や乗り越えてきた方、医療現場で活躍されている方を紹介します。
今回は、「国境なき医師団」日本の会長であり、医師の黒崎伸子さんです。



黒崎伸子さんが「国境なき医師団」に応募したのは、2000年のことである。

長崎大学病院の小児外科医だった黒崎さんは、病院の廊下の小さなポスターに、ふと目をとめた。

「あなたを待っている人たちがいます」

すぐに事務局に電話した。

医者になって、20年目。病院にもデジタル化の波が押し寄せ、患者さんと向き合うよりコンピューターに向かう時間が増えていた。大学病院の医師には、論文を書くという仕事もある。論文の出来が出世を左右するから、医療に全力を注がない。

このままでいいのかなあ……と、考えはじめていた。

最初に派遣されたのは、内戦下のスリランカだった。市中を、銃を持った兵士が歩いていた。

「何かあったら撃たれるんだな……とは思いましたが、医者がやるべきことは、日本も現地も変わりません。銃弾を受けた人、地雷を踏んだ人、栄養失調の子ども、出産間近の妊婦……緊急を要する重症者ばかりです。そこに、助けられる命がある以上、助けるしかない。兵士だろうとテロリストだろうとだれであろうと、ちゅうちょしている余裕はないんです」

あるとき、10歳のタミル人の少女が腹痛で入院していた。「胆道拡張症」と診断したが、数時間かかる手術をここで行えば、ほかのたくさんの方の手術に影響が出る。対症療法だけ行い、手術は首都コロンボの大病院で……と勧めた。すると、仲間たちにこう言われた。「なぜ、手術してあげない？」

国境なき医師団

紛争地や被災地で医療・援助活動を行う国際的な非営利団体。活動資金はほぼ民間からの寄付金でまかなう。現在28か国に事務局をもち、約36000人が活動中。日本では約300名がスタッフとして登録されている。

国境なき医師団では、寄付金を募集しています。たとえば、3000円で120人分の基礎医療セットが準備できて、5000円で12人に抗マラリア治療ができます。寄付の方法については、国境なき医師団事務局までお問合せください。

☎0120-999-199 (9:00~19:00 無休) <http://www.msf.or.jp>

くろさき・のぶこ

長崎県出身。長崎大学医学部卒業。長崎大学病院、健康保険諫早総合病院に勤務。長崎医療センター小児外科医長、長崎病院外科医長をつとめる。現在、実家の黒崎医院と市立大村市民病院に勤務。2001年より「国境なき医師団」に参加。スリランカ、リベリア、ソマリア、シリアなどに計11回派遣され、外科医として活動。2010年4月より「国境なき医師団」日本会長。

内戦下ではコロンボに行ってもタミル人は診てもらえない。黒崎さんが手術を終えると、少女の母親が泣いていた。「(もう大丈夫よ)」と声をかけても、泣いている。現地スタッフが教えてくれました。〈英語が話せないの、あなたにありがとうが言えずに泣いているのです〉。このときほど医者になってよかったと思っただけではありません」

医療の質は、インフラで決まる

帰国すると、大学病院に残してきたはずの自分の席に、ほかの医師が座っていた。「この国には、かわりの医者がいくらでもいる……。そのことがよくわかりました。日本では、患者さんは病院も医者も選ぶことができる。紛争地や被災地の人々には選択肢がありません。国境なき医師団のテントしか、頼る場所がないんです。もちろん、設備も医薬品も不十分です。限られた条件下で、患者さん

も医者も、最大限を尽くす。医療というものの原点を見せられたように思います」

もうひとつ、紛争地や被災地に派遣されて痛感したことがある。医療の質はインフラで決まるということだ。

「日本では、医薬品や電気や水などが整っていてあたり前です。しかし現地では、そうしたインフラが医療の質を決めてしまう。患者さんの命を救えるかどうかは、医師と看護師にかかっているというよりも、じつはロジスティシャン(物資調達などの担当者)の腕にかかっている。日本でも、医療のインフラを支える人たちの尽力に、もっと目を向けてほしいと思います」

黒崎さんは、一度だけ、医師団をやめたいと思ったことがある。

2003年に戦火のイラクに派遣されたとき、危険すぎて現地に入らず、何の役にも立てない自分が情けなくて、宿舎で泣いた。帰国すると、父が空港に迎えに来ていた。

「何かあったら、お前を引き取りに行かなきゃいけないから、パスポートの準備をしていたんだよ……」

その言葉に胸をつかれた。

「自分だけではない。私の家族も職場の人支援者の方々も、覚悟して応援してくれている……。これしきのことでやめちゃいけない、と思いき知らされました」

国境なき医師団に参加して5年目には、いつでも派遣要請に応じられるように、長崎大学病院の小児外科医長を辞職した。

もつと、自分の命、死と向き合う時間を

ふだん、黒崎さんは長崎県の黒崎医院(実家)や大村市民病院で診療している。

「どこかで災害や戦争が起きると、患者さんが(先生、行かなくていいんですか?)と言ってくれるようになります。うれしいですね」

日本にいても、現地で活動中の仲間たちや、知り合った

患者さんたちの顔が目につく。黒崎さんは、もうずいぶん前から、食べ物を残したり、水を出しっぱなしにはできなくなっている。

「紛争地や被災地の人たちは、つねに、死と隣合わせ。心の準備ができています。いまの日本人は最後まで自分の思いどおりに生きられると思っと思っていますから、準備がない。だから、最後まで、医者と死ぬことについて話し合うことにも抵抗がある」

たとえば、あと数日の命かも……というときに、じゃあ個室に移って家族とゆっくり話せる時間をつくらう……とは、日本の患者さんも医者も、なかなか言いだしにくい。

「自分がどんな医療をのぞむか、納得して病気にも最悪の事態にも向かい合えるように、ふだんから考えておいたほうがいいと思います」

そのほうが人生、豊かに送れるんじゃない……?

と、黒崎さんは、につこりとほほえんだ。

「ぼくは、自分の難病と正面から戦ったこと、ないんです」

「春山満さん」——ハンディネットワークインターナショナル代表取締役

病氣と向き合っている方や乗り越えてきた方、医療現場で活躍されている方を紹介します。今回は、ヘルスケア機器の開発・製造・販売ならびにコンサルティング業を営む春山満さんです。

春山満さんは首から下を自力で動かすことができない。

スキーもゴルフも得意なスポーツ万能だった青年が26歳のとき、「進行性筋ジストロフィー」と告知された。徐々に筋肉が萎縮し、筋力が低下

していく難病で、治療法はない。多くは幼少時に発症する病

気だが、春山さんは20代にな

ってから発症し、運動細胞膜が次々に破壊されていくめ

ずらしいケースだった。

「もうすぐ、車椅子になります。それも、長くは自分でこ

げません。ひょっとすると、首から下が動かなくなるかも

しれません……」

医者言葉に、春山さんの

頭は真っ白になった。

死を覚悟して、

前を向くことができた

当時、春山さんは過酷な人生に直面していた。父の経営

する不動産会社が倒産し、春山さんは借金を背負った。父

に代わって不動産事業を始め

てはみたものの仕事は難航し、借金がふくらんでいく。

このまま、絶望に埋もれてしま

うのか。それとも、かすかではあ

っても、光を見つけて追いかけるのか。

「悲嘆にくれている時間はあり

ませんでした。まず考えたのは、どうしたら生きてい

けるかです。首から下が動かなくなる。でも、話すことは

できる。聞こえるし見えるし、何より考える力が残されて

いるじゃないかと。その力を磨いていけばなんとか生きてい

けるはずやと。むりやりそこに目を向けました。そこに光を見つければ、あとはぜんぶ消えていくんやから」

春山さんは決心した。足が



春山さんが語る「生き抜く知恵」が聴けます。

「一燈照隅塾」(インターネット無料動画配信)

こちらにアクセス→http://www.hni.co.jp/hm_live.html

※過去放送分が聴けます

「ちょっと元気がないときの「気持ちの切り替えスイッチ」になれるうれしいです」(春山さん)

はるやま・みつる

1954年、兵庫県生まれ。26歳で進行性筋ジストロフィーと診断。1988年、大阪に介護用品のデパート「ハンディ・コープ」を開業。1991年、「ハンディネットワーク インターナショナル」を設立。自らの経験を生かして入浴介護機器やおしりが痛くないクッションなどを開発し、ヒットさせた。最新刊に「僕はそれでも生き抜いた」(実業之日本社)がある。

動かなくなる前に、自分の車椅子を押してくれる社員を雇えるようになるう、と。

昨日は上がった足が今日は上がらなくなる……日々衰えていく体にむち打って仕事に没頭した。病のことはいいさ、い隠して、金策に走りまわった。しかしある日、取引先から痛烈な叱責を浴びた。

「いつまで迷惑かけとんのや。おまえみたいなもんは仕事なんてやめてしまえ」

張りつめた糸が、ぶつ切り切れた。その晩、春山さんは死を決する。遺書を書き終えると、脳裏に婚約者の顔が浮かんだ。悪いことしたな。悲しむやろな。泣くやろな。でも、いつか忘れるやろな……。そのとき、春山さんの胸に、まだ経験したことのない感情がこみ上げてきた。

くやしい……！ オレが忘れ去られる。やがてすべての人がオレを忘れる——。春山さんは、いいようなない恐怖におののいた。

「本気で死のうとして、わか

りました。もう1日、恥をかいたらええ、と。それでもダメなら、明日死ねばええんや、と。まだ息も吸えるし、頭も動いているじゃないか。それからですね。人生、まだまだ捨てたもんじゃないと思えるようになりました」

死を決して考えたあの夜のことを、春山さんは「神様に試された夜」とふり返る。

**なくすものがあるから
見つかるものがある**

婚約者は、すべてを、受け入れてくれた。

30歳で結婚し、香港へハネムーン。それが自分の足で歩いた最後の旅行になった。

34歳のとき、介護用品の小売業を始めた。きっかけは、自身の車椅子体験にある。春山さんがはじめて車椅子を買ったとき、メーカーは春山さんの希望を確かめせずに規格品を納入してきた。足のかわりになる大切な機器が、使う人の立場でつくられていないことに驚き、怒りを感じ、

そこに大きなビジネスチャンスを見いだした。

いま、多くの社員たちが手となり足となつて、春山さんを支えている。このインタビューには、長男で社員でもある哲朗さんが同席し、春山さんの喉が渇くと、飲みものを口元に運んだ。

朝ひげを剃り、スーツを着せて「車椅子社長」に仕立てるのは妻の由子さんだ。春山さんは妻を「いちばんの戦友」と表現する。由子さんは、病の進行を目のあたりにしながら、一度も夫の可能性を疑うことはなかった。「どんななどん底にあつても希望を捨てない」という信念を支えにして、今日まで愛する夫と二人三脚をしてきた。

春山さんは読書家である。本を読むときは家族や社員に1ページずつめくってもらう。メモができないから、大事なことはすべて記憶した。英語も辞書に頼らずに一度見聞きしただけで頭にたたき込んだ。そういう能力が人間に

は備わっていると、いまでは確信している。

病はいまも進行している。体中の筋力を少しずつ奪いつづけている。

「病気になるなかったら。足が動いたら。それを百万べん繰り返しても何も変わらない。大事なことはいまを生きること。残されたものに目を向けること。ぼくはそう開きなおって生きてきました。不思議ですよね、あたり前の幸せがどんなにいとおしく、どんなにありがたいものか気づくんですよ。なくすから見つかるものがある」

ないものねだりをしない。なくしたものを数えない。「ぼくは、自分の難病と正面から戦ったこと、ないんです。むしろ、友だちになった。悪友ですけどね」

そうやって、春山満さんはにやつと笑った。

* 春山満氏は平成26年7月23日に進行性筋ジストロフィーによる呼吸不全で急逝されました。本欄「うららかに」が最後のインタビュー(7月14日)になりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

自分も苦しんだからわかる 「あなたひとりで、がんばらなくてもいい」

——大谷貴子さん—— **全国骨髓バンク推進連絡協議会 顧問**

病氣と向き合っている方や乗り越えてきた方、医療現場で活躍されている方をご紹介します。



1986年12月のある朝、大谷貴子さんは、体の異変に気づいた。生理の出血量がすさまじい。すぐに病院へ。

即、入院。

修士論文の仕上げにかかっていた25歳の貴子さんを、突然、「慢性骨髓性白血病」が襲った。医師から骨髓移植しか治療法はないと宣告された。

移植には、白血球の型（HLA）が同じ人の骨髓しか使えない。当初、実姉のHLAが同型と判定された。しかし喜んだのも束の間。「一部適合」で、移植はむずかしいことが判明する。大谷さんは、絶望の淵に立たされた。

HLAは両親が同じ兄弟姉

妹なら25%の確率で適合する。しかしそれ以外だと、数千人にひとりしか合わない。適合者を探すことは、事実上不可能に近かった。当時アメリカには、すでに骨髓提供者（ドナー）をHLA別に登録する骨髓バンクが存在したが日本にはまだ影も形もなかった。隣の病室にも、移植できずに苦しむ子どもたちがいた。

「なんで日本には、骨髓バンクがあらへんの！」

と、怒りがこみ上げてきた。

その頃、白血病の息子のために骨髓適合者を探している母親と出会った。大谷さんは彼女と協力して日本に骨髓バンクをつくるために動きだす。入院中の身でありながら、新聞社に骨髓バンク設立の話を持ちかけ、病室で週刊誌の取材を受けながら、骨髓バンクの必要性を世の中に訴えつづけた。「白血病の女子大生」と興味本位に取り上げられたこともあったが、骨髓移植の実態を知ってほしかった。

さいわい奇跡的な確率で、

ドナーサポートダイヤル

☎ 0120-892-106 平日10~17時

骨髄バンクのドナー（希望者・登録者・候補者・経験者）が抱えるさまざまな疑問について、全国協議会および、加盟団体の推薦を受けた相談員が相談を受付けている。

おおたに・たかこ

1961年大阪府生まれ。1986年、千葉大学大学院在籍中に慢性骨髄性白血病を発症し、母親の骨髄を移植して回復。現在、全国骨髄バンク推進連絡協議会の顧問として、骨髄バンクの啓蒙活動のため全国を講演に飛びまわる。

母親のHLAが大谷さんに適合して、骨髄移植は成功した。

「自分は、まさかの確率で母の骨髄を移植できたけれど、移植できるかどうかが運まかせなんて、おかしい。だれでも移植を受けることができるようにしなければ……」

という一心で、退院後も骨髄バンクを設立するために力を尽くす。同じ思いを抱く仲間も増え、大谷さんの自宅は、事務所と化した。すべてが手弁当、ボランティアだった。

そのとき、なにより力になってくれたのが、以前から骨髄バンクの必要性を説いていた現場の医師たちである。

「ある日、診察室をのぞいてみたら、先生が骨髄バンク設立の趣意書の入った封筒に、一人で黙々と切手を貼っていた。これ以上、助かったかもしれない命の死亡診断書を書きたくない……。その思いを一枚一枚の切手に込めているように見えたんです」

大谷さんたちの活動が実り、1991年、厚生省が骨髄移

植推進財団を認可し、ついに日本骨髄バンクが誕生した。

私の幸せ、ひとりじめになんてできへん

大谷さんは、骨髄移植によって命を取り戻した。移植後も順調に快復し、いまでは支障なく日常生活を送っている。しかし、生理は戻らなかった。

移植から3年目の検診のとき、「閉経」を告げられたが、移植にともなう副作用であることを、知らなかった。

「子どもが産めなくなるぐらいなら、移植なんてせんほうがええ！」

なぜ、だれも副作用について教えてくれなかったのか。悲しみと怒りで、一時は骨髄バンクの啓蒙活動を続ける氣力を失った。

骨髄バンクの顔としてがんばっている私。骨髄移植による不妊で悲嘆にくれている自分……。この二人の自分を抱えて、どうしても氣持の折り

合いがつかなかった。

そんな彼女をもう一度前に向かせてくれたのは、ともにドナーを探しながら懸命に生き、移植を受けられずに亡くなっていた、仲間たちの姿だった。

「あたり前の人生を送りたいだけや」。その言葉、忘れられへん。さいわい私は、あたり前の人生を歩めているけれど、この幸せをひとりじめになんてできへん。移植を受けたいと願う人のために、ひとりでも多くのドナーを探さなアカン」

最近では、医療の進歩により、抗がん剤治療を受ける前に、未受精であっても卵子を保存することができるようになった。大谷さんは、この「卵子凍結」についての啓蒙活動にも力を入れている。

「患者さんには治療の選択肢を残してほしい。選択肢がない状況に直面するのは、つらすぎる。骨髄移植も選択肢のひとつであってほしいし、女性にはがん治療を受けても子

どもを持てるという選択肢を残してほしいんです」

大谷さんは、夜でも携帯の電源を切らない。患者さんやその家族から寄せられるさまざまな相談にのっている。

「心細い気持ちで電話してこられるんですよ。その人たちに、なにより、あなたはひとりじゃない」と伝えたい」

白血病の苦しみも、ドナーを待つ一日千秋の思いも、移植手術後のつらさも、大谷さんは知っている。

「患者はいつだって、いまを生きることに精一杯です。が、んばって」とは言えませんが、そのかわり、私にできることを教えて」と聞いてみる。以前は「私もがんばるからあなたもがんばり！」と言っていました。でも、あなただけががんばらなくてもいい……。そう思うようになりました」

そう語る大谷さんの笑顔が、胸にしみた。取材が終わるとタクシーに飛び乗って、大谷さんを待っている患者さんののもとに向かった。

※骨髄移植と不妊について 骨髄移植を受ける患者さんは、骨髄移植の前処置として、骨髄液中の白血病がん細胞を消滅させる必要がある。前処置では、抗がん剤治療や、放射線治療が行われるが、副作用として卵巣機能が失われる可能性がある。

新しい脳は、 新しい挑戦に使いたい

— GOMA さん —

体を動かし、高次脳機能障害のリハビリに励む

病氣と向き合っている方や乗り越えてきた方、医療現場で活躍されている方を紹介します。
今回は、記憶障害とつき合いながら、音楽活動、絵画活動が続ける GOMA さんです。



ごま

1973年大阪府出身。オーストラリア・アボリジニの管楽器ディジュリドゥの演奏家。
1998年にオーストラリアのコンペティションで準優勝。国内外で音楽活動を始め
る。2009年に交通事故で軽度外傷性脳損傷を負う。昨年、ドキュメンタリー映画『フ
ラッシュバックメモリーズ(3D)』が公開された(2013年8月2日にDVD発売予定)。

www.gomaweb.net

パツと見、GOMAさんにはなんの障害もない。取材に
応える語り口もおだやかで、
話の内容も整然としている。

GOMAさんは、世界最古
といわれる管楽器ディジュリ
ドゥの演奏家である。

ディジュリドゥはオースト
リアの先住民アボリジニた
ちの楽器で、その地響きする
ような通低音の迫力に、日本
人にもファンが増えている。

もちろんGOMAさんは、
今も積極的にライブ公演を続
けている。交通事故で負った
外傷性脳損傷による記憶障害
と闘いながら……。

2009年の11月。高速道
路を運転していたGOMAさ

んは、渋滞の最後尾に並んだ
とき、後ろから追突された。
直後に搬送された病院では、
むち打ち症と診断された。

しかし翌日、妻の純恵さん
が異変に気づく。何度も演奏
したところのあるライブハウスの
名前を、まったくおぼえて
いなかったのである。

外傷はない。脳のMRI検
査でも損傷はなかった。MRI
に写らないほど細かい傷が
脳の表面いっぱいできてい
たのがわかったのは、だいぶ
たってからだった。

軽度外傷性脳損傷。

脳の損傷は「軽度」だった
が、脳機能の受けたダメージ
は、大きかった。これを専門
的には「高次脳機能障害」と
呼ぶ。脳表面の無数の細かな
傷が神経細胞を傷つけて、考
える力、記憶する力、行動や
感情をコントロールする機能が
障害される。症状は人によっ
て、すべて違う。

記憶障害には2種類ある。
ひとつは過去の記憶を思い出
せなくなること。もうひとつ



写真左／GOMAさんの描いた絵。「描いたことさえ忘れてる絵もある。でも、絵を見ると、確かに自分が描いた、という事実が勇気づけられるんです」 写真右／ディジュリドゥは、吹きながら息を吸う「循環呼吸法」で演奏する。取材中、アトリエにやさしい音色が響いた。

は新しいことを覚えられなくなること。GOMAさんの場合は、その両方である。事故後しばらくは、5分前のことを思い出すのも難しかった。

演奏仲間と撮った写真を見ても、なぜ自分がそこにいるのか、わからない。病院でも何をしに来たのか忘れてしまう。帰り道もわからない。

それだけではない。平衡感覚や味覚、食べ物嚥下する力、注意力、集中力、感情をコントロールする力など、これまであたり前に使っていた能力の低下にも苦しんだ。

**妻と手探りで
リハビリを始めた**

あるとき、GOMAさんは突然、絵を描き始めた。絵筆を取ったのは「小学生以来」だった。娘の絵の具セットを使って、細密な点をひとつひとつ、無心に、画用紙の上に置くように描いていた。

不思議で幻想的な絵。何を描いたのか、どうしてすべて点なのか、GOMAさん

んにもわからない。

「何かの記憶の断片。失われた記憶が送ってくるメッセーじ……なんでしょうね」

高次脳機能障害には、まだ

リハビリ法が確立していない。医師のアドバイスは「好きなことをやりなさい」だった。

妻の純恵さんと本やインターネットで情報を集めて、試

行錯誤しながらリハビリ法を探っていくことになった。

おぼえたいことはすべて紙に書き出した。「メールおぼえる。日記を書く。リズムセ

クシヨンの新曲をおぼえる……」。どれも、おぼえるまで何百回も繰り返した。

そうすることで、子どもが自転車の乗り方を覚えるように、体にしみ込んで忘れない。

一年ほどかかったけれど、iPhoneを使えば外歩きも出来るようになった。

有酸素運動が有効だと知って、ジョギングやヨガも始めた。好きだったサーフィンを

しに海へも出かけてみた。しかしボードに乗りうるとすると

体のバランスが崩れた。

「何度も落ちましたよ。でも、ふだん動かさないと場所を動かそうと意識することが、脳にとつていいみたいです」

**脳に新しい記憶を
ためこんで
新しいGOMAになる**

事故から約1年後、仲間や家族の尽力で東京・青山で絵の個展を開くことができた。

思いがけなく、大きな反響を呼んだ。同じように高次脳機能障害を負った人、その家族などがおおぜい画廊を訪れたのである。音楽家GOMAのことは知らなくても、絵の前でぼろぼろと涙を流す人がいた。GOMAさんの手を握って「元気が出ました」と言

ってくれる人もいた。

「僕にもまだできることあるやん！ 人生あきらめかけてたけど、待っていてくれる仲間がいる。絵に感動してくれる人がいる。もう一度、がんばってみようと思いました」

さいわい、ディジュリドゥ

の吹き方は体が覚えていた。

2011年6月、静岡でのコンサートに成功させた。途中で戸惑わないように（今、静岡でLIVE中）というメモを目の前に貼って演奏した。

「いまの僕には、使える記憶の力は限られている。同じ使

うんやったら、昔の記憶を取り戻すために使っじゃなくて、新しい挑戦に使いたい。事故から3年過ぎた頃から、

思うんですよ。あの日があつたから、いま僕があるんだな、と。いまの自分ができ

ることを素直にやっついこうと思えるようになりました」

損傷した神経細胞が再生することは、ない。けれども脳には、毎日、新しい神経のシ

ナプスが生まれている。

「10年、15年かけて、新しい脳ができあがるそうです。この先、自分がどうなっていくのか、いまはそれを楽しもう

と思っています」

GOMAさんは、今年40歳。10年後、50歳になった新しいGOMAさんに会いたい。